
鍋

L i t a l y

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鍋

【Nコード】

N5029B

【作者名】

L i t t a l y

【あらすじ】

そもそもあらすじを書かねばならない理由が僕には分からないのであらすじは書かない。自分にとってそれが読むべき文章なのか、そうでないのかは、最初の数行を読めば分かるはずだからだ。

新聞屋の忘年会の後、二次会をすっぱかして実家に帰って鍋を食べた。

テーブルの左に座った親父が、かつおの茶漬けがどうだのと言う。その横に座ったお袋が、鍋に入れた魚の小骨がどうだのと言う。台所の奥で鍋がぐつぐついている。ストーブの前で老いた猫が丸くなってる。

本当に、なんでもないことだけど、家族っていいなって思った。

うちの実家は基本的に小汚いし、安っぽい感じのものしかないし、そんな安っぽいものが雑然とあちこちに統一感も無く置いてあって、なんていうか見事に絵にならない家だ。間違ってもドラマや映画のワンシーンにはならない光景だ。

でも、そんな風景の一部になって、鍋をつつく。ポン酢のすっぱさ。

熱い物を食べると鼻水が出る。

お茶が熱すぎてちよつと舌をやけどする。

帰りにゴミ捨てを頼まれて、それを抱えて家を出る。

本当に絵にならない、グダグダなワンシーンだ。

でも、俺が一番素直に、シンプルに、気張らずに幸せを感じる瞬間だ。

多摩ニュータウン。

この街には下町のような人情や暖かさもない。
洗練された街のこじやれた感じもない。

大した娯楽施設もない。

スタイリッシュさもなければ、心温まる場面も無い。
ただ、なんとなくくだいだした空気だけが漂ってる。

でもここが俺の育った街で、俺はその「人情」も、「スタイリッシュさ」も無い、本当に何も無いこの街にしかないものを、ずっと感じながら25年間を生きてきた。

特筆するほどの人情も、特筆するほどの洗練されたものも無かったから、特筆するほどでもない心のかすかな温度や、特筆するほどでもない曖昧なディテールの持ち味に敏感になったんだと思う。
俺はこんな自分を嫌いじゃない。
だから幸せだ。

幸せすぎて色んなものに、自然と感謝の念が沸いてくる。

でも幸せすぎて、暖かいストーブの前に立つと、ストーブの温度を知らない子供が今もどこかで孤独を抱いているんだって事を強く感じる。

暖かい家族の風景の一部としてそこに座っていると、家族の温かみを知らない子供が今もどこかで孤独を抱いているんだって事を強く感じる。

なんだか色んな気持ちが沸き起こって泣きたくなる。

こんな夜は誰かがそばにいて、ただ一言「いいのよ」って言うてくれたならホントに泣いちゃうかもしれない。

でもそんな夜こそ何故か俺は歌いには行けない。

これ以上満たされようとする自分の傲慢さに何かを感じるのかもしれない。

あるいはそうじゃないかもしれない。

でも何でかはわかんないけど、こんな夜は一人で寂しい気持ちでいたい。

じゃないと次に「幸せな風景」を見た時、彼等にきちんと感謝の念を抱けない気がする。

全部抱えて幸せになりたい。

それこそ鍋みたいに、あらゆる嬉しさと、あらゆる寂しさと、あらゆるいい部分と、あらゆる悪い部分と、全部放り込んで、ぐつぐつ煮込んで、ぺろりとたいらげちゃいたい。

俺が幸せを感じるその理由は孤独ゆえなのかもしれない。

気張らないで幸せになる方法を模索してる。

気張らないで幸せにする方法を模索してる。

本当の平和なんてそもそも初めツから諦めてる。

俺だってそこまで馬鹿じゃない。

色んな事情だって理解してるつもりだ。

平和を妨げるのは一部の権力者や独裁者でも、どうにもならない「事情」でもない。

皆が本当はそんなもの願ってないからだ。

この国みたいな、優位な位置にある国の人たちは自分達の欲望を満たす事ばかりしか考えない。

世界の何割といわれるほどの資源を消費しても、やはりこの国の皆は満たされないと言う。

もつともつとて言う。

足りない国はもつともつと足りなくなる。

ちよつとだけ足りない国の事を想像してみたって歌ったって誰もそんな声に耳を傾けない。

自分の「事情」で精一杯だと言う。

これだけ優位な立場にある国の人たちが自分の事情で精一杯なんだから、不利な立場にある国の人たちなんていっぱいどころか、完全にアウトだろう。

だから沢山の人がしぬ。

だから永久に平和なんて訪れない。

もう少しだけ、自分より不幸な人の気持ちを想像してみてよって俺は歌った。

ボブデュランも歌った。

ジョンレノンも歌った。

でも駄目だった。

ジョンレノンは死んじやったし、ボブデュランは諦めた。

多分俺も諦めるべきなんだろうなって思う。

分かってるんだ。

どうにも諦めきれず燃え残った残りかすみみたいなものをただ半額処分品みたいに音に乗せて垂れ流してるだけだ。

平和への「行為」でも「願い」でもない。

ただきつちり諦めがつかないだけ。

惨めなもんだ。

でも、そんな俺だって俺なりに幸せになったり幸せにしたりしたいなって思うし、その為の努力を俺なりにはしたいなって思う。

多分俺のこの試みはうまくはいかない。

でもこの際結果はどうだっていい。

俺を愛してくれる人に感謝して、愛を知らない人の為に歌うだけだ。

もつと出来る事はあるのかもしれない。

それが出来ないのは俺の弱さと姑息さなんだろう。

その事自体に対して言い訳するつもりはない。

俺の器の小ささの表れなんだろう。

全面的に俺が悪い。

でもこれが俺。

なんだかどうしたらいいのかも分からない。

だから俺の試みは多分うまくはいかない。

でも幸せな気持ちだけは知ってる。

家族って鍋みたい。

鍋よりかつおの茶漬けのほうがいい時もある。

だしをとるために入れた魚の小骨が喉に刺さって嫌な気持ちになったりする。

普通のポン酢が無くてゆずポンで食べてみたら、風味が損なわれてちよつとがっかりしたりする。

暖かくて、なんか嬉しい気持ちになる。

でもいつかなくなる。

だから生きていつか死ぬ事を本気で覚悟する。

彼等が死ぬ事を、自分が死ぬ事を覚悟する。

そうやって結局明日も生きる。

ただそれだけ。

皆も家族は大事にしたほうがいいよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5029b/>

鍋

2011年1月16日06時46分発行